筑波学院大学紀要第10集　121 ～ 131 ページ　　2015年

＜研究ノート＞

西園寺公望公の第１回外遊について

川崎　晴朗*

On Saionji Kinmochi's First Sojourn Abroad 1871–1880

Seiro KAWASAKI *

要　約

（1）本稿では、*The New York Times*、*The Japan Weekly Mail* 等により、西園寺公望公の第１回外遊に関連して公の横浜よりの出帆日、乗船した船名等を明確にした。出帆日は1871年１月23日（明治３年12月３日）、乗船した船名は米国 PMSS 社の The Great Republic である。

この船には、米国に留学する伏見宮博經殿下、森有禮・初代駐米公使（当時は「少弁務使」といった。）等が乗船していた。一行はサンフランシスコで同地駐剳ブルックス名誉領事に迎えられ、彼と共に汽車でワシントンへ向かった。

森公使は1871年３月２日（明治４年１月12日）、日本の駐米外交使節として米国務長官に信任状を提出したが、その日の夕べ、グラント大統領は伏見宮殿下、森公使、そして西園寺公を含む留学生たちをホワイトハウスに招いた。

（2）西園寺公は３月６日、イギリスへ向けて出帆、15日到着、27日にフランスを指して出発したが、このときイギリスで会った栗本貞治郎がパリまで同行した。パリに到着したとき、「パリ・コミューン」の乱の最中であった。

（3）西園寺公が帰国したのは1880年（明治13年）10月21日で、*The Japan Weekly Mail* により公が同日、フランス船 Tanaïs により横浜に入港したことが確かめられた。

（4）10年近いパリ滞在中、公はジュディット・ゴーチエのため和歌88首の下訳を行なった。西園寺公は、彼女の文学活動を支えたことでフランスにおけるジャポニスムの高揚に一役買ったといえるであろう。

Summary

Kinmochi Saionji (1849–1940), one of the best-known statesmen of modern Japan, made his first trip abroad as a young man of twenty-two. Such essential information, however, concerning his trip to France through the United States of America and the United Kingdom — as the date of his departure from Yokohama, the name of the boat he took, etc. — has not been sufficiently established.

This article is an attempt to consolidate such and other related information by referring to *The New York Times, The Japan Weekly Mail* and other sources. Thus, the author could determine that his boat, The Great Republic, left Yokohama on January 23, 1871; it was also found out that aboard the same boat were H.I.H. Prince Hushiminomiya and H.E. Arinori Mori, the first diplomatic envoy to the United States.

＊　愛知大学、University of Aichi Institute of International Affairs

The party was received by Mr. Charles W. Brooks, Japan's Honorary Consul in San Francisco. Mr. Brooks accompanied the party to Washington, D.C., where Mr. Mori presented his credentials to Mr. Hamilton Fish, Secretary of State, in the capacity of Chargé d'Affaires of Japan, on March 2. President Grant held a reception for the party that evening.

In London, Mr. Saionji met Mr. Teijiro Kurimoto, who was teaching Japanese at l'École des Langues Orientales in Paris, and Kurimoto accompanied him as far as Paris.

The young Saionji stayed in Paris from 1871 to 1880, acquiring a mastery of French. It should be noted that he assisted Miss Judith Gautier (1845–1917), daughter of the French poet Théophile Gautier (1811–72), in translating eighty-eight Japanese poems into French. Her book, entitled *Poèmes de la Libellure*, appeared in Paris in 1885, i.e., after Mr. Saiomji's departure from Paris.

Mr. Saionji came back to Japan, arriving at Yokohama aboard le Tanaïs, on October 21, 1880, the date the author found in *The Japan Weekly Mail*.

はしがき

1870年１月22日（明治２年12月21日）、横浜で *The Japan Weekly Mail* が創刊された。幕末、横浜に建設された外国人居留地は維新後日本最大の居留地に発展したが、ここに住む外国人のために発行された英字紙である。とくに“Shipping Intelligence”（のち“Latest Shipping”）の欄は毎週横浜港に入港または出港するあらゆる船につき船名、船籍、船長名、トン数、船を所有する会社名、出発地・目的地などを明らかにしており、またしばしば乗客名簿が添えられていることもあって、われわれに貴重な資料を提供してくれる。この英字紙は明治32年（1899年）７月に日本における居留地制度が廃止されたあとも刊行がつづけられ、大正12年（1923年）９月の関東大震災のあと廃刊となった。

さて、西園寺公望公（1849–1940年）は生涯に５回外国に出掛けているが、第１回の外遊については資料により彼の出発日も彼が乗船した船の名前も異なる。立命館大学西園寺公望伝編纂委員会編『西園寺公望伝』（岩波書店）の別巻２（1997年刊）に収録されている「自伝草稿」Ｉから正確な出発日、フランス到着時のパリの状況などが判明するが、西園寺公の第１回の外遊をめぐって実にさまざまな人々・事件との邂逅があった。「自伝草稿」Ｉの記述はやや簡潔過ぎると言わざるを得ない。本稿により、筆者が収集し得た限りの情報をもって「自伝草稿」Ｉの記述をできるだけ補充したいと思う。

第１章　西園寺公の出発

１．『西園寺公望伝』に収められている「自伝草稿」Ｉから、まず当時22歳の西園寺がいつ、どのようにしてフランスへ渡ったかを眺めてみよう（4–7頁、11–22頁）。

明治３年10月21日（1870年11月14日）、太政官より西園寺公に対し「仏国勤学、被仰出候事」の命が下り、公は同月27日（11月20日）、横浜に移る。12月３日（1871年１月23日）、米国郵船「大共和制」に乗り込み、米国へ向けて出帆する。この船には多くの日本人が乗っていた。米国へ向かう者は森有禮（ありのり）少弁務使ほか10名、イギリスへ行く者20名近くいたが、「仏ニ至ル者ハ即一人ナリ」という（５頁）。これが西園寺公である。ちなみに、在外使節の制度が創設された当時、使節の階級は大弁務使、中弁務使及び少弁務使の三つであった。この点については、のちやや詳しく述べる。森は初代の駐米外交使節で、階級は少弁務使（のちの代理公使）であった。

船は明治３年12月27日（1871年２月16日）、サンフランシスコに入港する。一行は29日

（２月18日）、汽車でサンフランシスコを出発、明治４年１月５日または６日（２月23日または24日）、ニューヨーク、さらに12日（３月２日）、ワシントンに到着する。16日（３月６日）同地を出発、西園寺公とイギリス組とは船で大西洋を渡る。25日（３月15日）、ロンドンに到着、２月７日（３月27日）、西園寺公はイギリスを離れ、最終目的地のフランスへ向かう（７頁）。

『西園寺公望伝』によると西園寺公が横浜を出航したのは明治３年12月３日である。岩井忠熊『西園寺公望―最後の元老―』（岩波新書、2003年）も同様である（20頁）。

西園寺公の出発日につき、田中貢太郎『西園寺公望傳』（改造社、1932年）は、「出発の年月日は竹越与三郎『陶庵公』に依ると明治４年正月となってゐるが、最近安藤徳器君の考証によると、明治３年11月比（ころ）だといふことである。しかし、公の書簡に従つて、…辭令の出た明治３年12月上旬と見るのが至當であらう。」といっている（93頁）。

しかし、安藤徳器『西園寺公望』（白揚社、1938年）は、「西園寺公は洋行の念願がかなって、明治３年12月３日出発した。」と正しい日付を掲げている（114頁）。この書物が出版される前の一時期、彼が明治３年11月説を唱えていたことが考えられる。

サンフランシスコまで西園寺公が乗った船名を西園寺公自身は「大共和制」といっているが、これはThe Great Republicのことである。しかし、田中『西園寺公望傳』は「米船コスタリカ」といっている（93頁）。豊田穣『最後の元老　西園寺公望』上巻（新潮文庫、1985年）も同断である（81頁）。

２．それでは*The Japan Weekly Mail*を読んで見よう。まず利用した船であるが、The Great RepublicもThe Costa Ricaも米国船で（前者は3,000トン、後者は2,000トン）、当時The Great Republicはサンフランシスコおよび香港の間を就航しており、途中横浜に立ち寄っていたのである。一方、The Costa Ricaは横浜・上海間を就航していた。西園寺公がThe Costa Ricaに乗船した筈がない。

1871年１月21日　付*The Japan Weekly Mail*によると、同年１月20日、The Great Republicが香港より横浜に到着（38頁）、また28日付によると１月23日、サンフランシスコへ向けて出港した（50頁）。明治３年12月３日は西暦では1870年１月23日にあたる。したがって、この英字紙の報道は西園寺公の「自伝草稿」Ｉの記述と完全に一致する。

この船はPMSS（Pacific Mail Steamers）社に所属し、船長はFreemanといった。

一つ贅言を述べさせて頂くならば、The Great Republicは1871年３月27日、サンフランシスコより横浜に到着、同月29日、香港へ向けて出帆した（４月１日付、163頁）。４月20日、香港より横浜着（４月22日付、208頁）、同月22日、サンフランシスコへ向かった（４月29日付、223頁）。The Great Republicが横浜に到着・出発する頻度や同地での滞在期間がかなりの程度まで推測できるであろう。

筆者は立命館大学西園寺公望伝編纂委員会のメンバーであり、また前掲『西園寺公望―最後の元老―』の著者でもある岩井忠熊名誉教授に*The Japan Weekly Mail*により西園寺公の離日が明治３年12月３日（1870年１月23日）であることが確かめられた旨お伝えしたところ、同教授から「この資料（*The Japan Weekly Mail*）のことはまったく念頭になく迂闊でした。しかし、『西園寺公望伝』の記述と一致しているので安堵しました。」との御返事を頂いた。岩井教授は1922年（大正11年）のお生まれで、すでに卒寿を迎えられた方であるが、人生の大先輩からこのような謙虚な御返事を頂き、筆者の方がすっかり恐縮した次第である。

３．ところで、前掲の田中『西園寺公望傳』によると、西園寺公は太政官からフランスへの官費留学につき許可されたとき「あまりは

しやいだことのない公も、此の時は跳りあがつて喜んだ。」という（92頁）。これが明治３年10月21日（1870年11月14日）のこととすれば、そのわずか６日後、彼は横浜に移って出航の日を待ったことになる。独身男性とはいえ、外国へ行くのに随分手回しのよいことである。おそらく10月21日の前に太政官から彼に対し何かの形で内示があったのであろう。また、当時は外遊の準備については東京より横浜の方が便利であったと思われる。『西園寺公望伝』の別巻２に載っている「自伝草稿」IIは、西園寺公が横浜で「船及車ノ手形ヲ買ヒ、其他、百般旅ノ調度ヲナス、…」と記述している（11頁）。「車ノ手形」は、おそらく米大陸横断鉄道の乗車券のことであろう。

1871年２月25日 付 *The New York Times* に２月16日サンフランシスコに到着した日本人一行の氏名リストが掲げられているが（第１面）、非常に不完全でまた誤植も多い。このリストには、まず H.I.H. Fushimi Mitsnomiya、すなわち伏見宮博經（ひろつね）殿下（伏見宮邦家親王の第12王子、のちの華頂宮）、つづいて森少弁務使が出てくる。そのあと両者それぞれの随員たちがくる。最後に“students”として13名の名が掲げられているが（西園寺公の氏名は載っていない。）、その一方で「数人の（several）学生はニューヨークに留まり、５名はイギリス、14人はプロイセンに行く。」と書いている。

伏見宮殿下についてであるが、『明治天皇記』によると同殿下の米国留学は明治天皇から勅許されたもので（第二、309頁）、帰朝されたのは1873年（明治６年）８月であったという（同第三、122頁）。

第２章　最初の駐米外交使節・最初の在サンフランシスコ領事

１. ここで、外務省百年史編纂委員会編『外務省の百年』上巻（原書房、1969年）により、明治新政府が創設した在外使節の制度につき触れたい。

明治３年 閏10月２日（1872年10月26日）、外務省は在外使臣の官制を創設することとし、大・中・少弁務使の三つの階級を定めた。さらに大・少記を設け、一等の大・少記は大・中弁務使に、また二等の大・少記は少弁務使にそれぞれ附従するとした（70-1頁）。

この日（明治３年閏10月２日）、鮫島尚信に対しイギリス・フランス・プロイセン３ヵ国駐劄、また翌日（閏10月３日）、森有禮に対し米国駐劄を命じた。いずれも資格は少弁務使であった（70-1頁）。

明治５年10月14日（1872年11月14日）、大・中・少弁務使及び大・少記は廃止され、大・中・少弁務使はそれぞれ特命全権公使、弁理公使及び代理公使に名称を改め、また同日及び10月28日（11月21日）、大記及び少記に代わってそれぞれ一・二・三等書記官及び一等から八等までの書記生が置かれた（74-5頁）。このように、明治３年から５年にかけて外務省の在外職員の制度が創設・整備され、これにより在外公使館が開設されていったのである。（当時は特命全権大使に相当する階級の使臣はまだ設置しなかった。なお、同時期に領事制度も確立したが、これについては省筆する。）

２. 森少弁務使の随員については、次項で述べるように３名いたが、『太政官日誌』からそのうちの１名の氏名・資格が判明する。すなわち、同日誌の明治３年第47号によると、同年閏10月の項に名和権少記が「記録會計等取扱」を申付けられている（258-9頁）[(1)]。

第３章　首府ワシントンにて

１. 明治３年12月３日、すなわち1870年１月23日、西園寺公と共に米国へ向かった日本人の一行は、明治４年１月12日、すなわち1871年３月２日、ワシントンに到着する。

「自伝草稿」Iは「12日朝（ワシントンに）着ス、大統領ガラントニ面会ス、森（少弁務使）、以下十余人ナリ、…」と述べ、また「自伝草稿」IIは「（ニューヨークから）更ニ首府華頓ニ往キ、森公使、諸人ト共ニ、大統領ガラントニ会ス、…」と記述する（それぞれ６、12頁）。

森少弁務使、西園寺公等は、明治４年１月12日（1871年３月２日）、すなわちワシントンに到着したその日のうちに大統領に面会したことがわかる。当時の米国大統領はUlysses S. Grantであった。「ガラント」は「グラント」とすべきであろう。

それでは、森少弁務使はこの日Grant大統領に信任され、公務に入ったのであろうか。しかし、国際法上、少弁務使（代理公使）は赴任国の元首ではなく外務大臣（米国の場合は国務長官）に信任状を提出する。当時の米国国務長官はHamilton Fishであったが、森少弁務使は大統領ではなく国務長官に信任されたのであろうか。筆者が1871年３月３日付*The New York Times*を読んだところ、２日ワシントン発の記事があり（第１面）、次の諸事実が明らかとなった。

(i) 森少弁務使は、３月２日昼ごろFish国務長官に信任状を提出した。（森少弁務使には３人の公使館員が同行していたが[(2)]、うち少なくとも名和権少記は、森少弁務使の信任式にも立会ったであろう。）

代理公使でも国家元首に信任状を提出することがある。例えば、日本でもスペインの初代代表Don Tibúrcio Rodriguez y Muños代理公使は1870年３月８日（明治３年２月７日）、明治天皇に信任状を捧呈している。もっとも彼は常駐ではなく、一時的な使節であった（宮内庁『明治天皇紀』第二、263-4頁）。筆者は、当初森少弁務使も日本の初代代表でもあり、大統領が彼から直接信任状を受領したとしても決しておかしくないと考えたが、実際には、森少弁務使は国際法にのっとって国務長官に信任されたのである。

(ii) 同日午後８時、伏見宮殿下及び森少弁務使はそれぞれ随員を従え、ホワイトハウスのブルーの間でGrant大統領と会見した。日本の在サンフランシスコ名誉領事ブルックス（Charles W. Brooks）が日本人全員をFish国務長官に、そしてFish長官が大統領に紹介した。米国側に大統領夫妻、令嬢Nellie、Fish長官夫妻等がいた。

このとき、おそらく大統領は晩餐会を催して日本から来た２組の賓客をもてなしたのであろう。西園寺公は森少弁務使の信任式には立ち会わなかったであろうが、大統領の設宴には出席した。これが「大統領ガラントニ会ス」（または「面会ス」）の意味するところである。

(iii) The Great Republicがサンフランシスコに到着したとき、一行はブルックス領事に迎えられ、同領事はワシントンまで一行に同行した。

ブルックスはアメリカ人である。幕府が慶応３年９月、ブルックスを名誉領事として雇い入れ、サンフランシスコにおける領事事務を委託したのであるが、明治政府は引き続き彼を雇用したのである[(3)]。もちろん、ブルックスは日本が同地に置いた最初の領事官である。偶然のことであろうが、西園寺公は日本の初代駐米少弁務使と同じ日程でワシントンまで行き、また明治政府により任命されてわずか数ヵ月後のブルックス領事とサンフランシスコ・ワシントン間を共に旅したことになる。しかし、西園寺公は「自伝草稿」でブルックスについてまったく触れていない。

２．さらに一、二の点を付け加えたい。

(i) グラント大統領は南北戦争で北軍総司令官となり、数々の武勲をたてた将軍であるが、大統領を辞したあと世界一周を行なった際、1879年（明治12年）６月から８月にかけて日本を訪問している。明治天皇は「特に各國皇族の來朝に準じて國賓の禮を為さし」め（宮内庁『明治天皇紀』第四、697頁）、７

月４日グラント夫妻を会見、７日、芝離宮の午餐に招いたり、８月10日には子息と共に濱離宮に招いて会談を行なったりされた（同、725、719-728頁）。離日前の８月30日、グラント夫妻と子息とはビンガム駐日公使（John A. Bingham）を随えて参朝し、天皇にお別れを告げている（同、741-2頁）。夫妻は天皇との会談中、８年あまり前に伏見宮殿下や森少弁務使の一行をホワイトハウスにお招きしたことを話題の一つにしたかも知れない。

（ii）外交使節の階級は大弁務使、中弁務使及び少弁務使の三つであったが、既述したように明治５年10月14日（1872年11月14日）、それぞれ特命全権公使、駐在公使及び代理公使に改められた。当時森少弁務使はまだ米国に在任中であったが、肩書が少弁務使から代理公使に変更された。英語では少弁務使も代理公使も“Chargé d'Affaires”であるから、ワシントンで発行していた外交団リストの上では変更はなかった筈である。

第４章　米国からイギリス・フランスへ

１．前述のように、西園寺公はイギリスに留学する20名近い学生と共に1871年３月６日（明治４年１月16日）、米国を離れる。彼等の船はニューヨークを出港したと思われるが、３月５日付及び６日付 *The New York Times* の“Movements of Ocean Steamers for Europe”欄に同地を解纜予定の船名が掲げられている（いずれも第８面）。同一内容で、３月６日にイギリスのリヴァプール港へ向かう船は The City of Baltimore しかない。乗客名簿はないが、西園寺公たちが乗った船は間違いなくこれであろう。

２．筆者は、西園寺公のイギリスからフランスまでの旅程についてささやかな疑問をもった。「自伝草稿」I によると、西園寺公は1871年３月27日にイギリスを離れてフランスへ向かう。「英ニ留ル、十余日、…仏ニ来ル」とあるが、イギリスには３月15日に到着したので「英ニ留ル、十余日」というのは正しい。しかし、「仏ニ来ル」といっているが「パリに来た」といっていないので、西園寺公が何日かけてパリに到着したのかがわからないのである。ロンドンからドーヴァーに移り、船で英仏海峡をわたってカレーに上陸したのであろうが、彼はパリまで真っ直ぐに行ったのか、あちこち寄り道しながら行ったのか。

「自伝草稿」II には、西園寺公はイギリスで栗本貞治郎（ていじろう）に会い「（貞治郎が）仏ニ帰ルニ便シ（伴ヒ）、仏ニ到ル、」とある。栗本貞治郎については後述するが、彼は２回目のフランス滞在中、イギリスに足をのばしていたところに西園寺公が到着したのである。２人が会ったのは偶然によるものであろうか、それとも栗本は西園寺公を迎える目的でパリからロンドンへ行ったのか。

西園寺公は「自伝草稿」II で「予二月七日、英ヲ出テ此地ニ着セリ。」と述べている（22頁）。前掲の豊田『最後の元老　西園寺公望』は公がロンドンから一晩でドーヴァー海峡を渡り、パリへ行った、と述べ、さらに「パリに入ったのは四年二月七日である。」と書いているが（上巻、86頁）、これは如何なものであろうか。明治４年２月７日は1871年３月27日である。前述のように西園寺公は1871年３月27日にイギリスを去ったと言っているのであるから、栗本と共にその日の内に海峡を越え、カレーに上陸したことがわかる。よって筆者は、「此地」とはパリではなくフランス（具体的にはカレー）を指していると考えたい。カレーからパリまでの日程は明らかでないが、空の便がない時代である。公は、栗本と一緒に、二、三日をかけてパリに入ったというのが常識的な解釈であろう。

３．「自伝草稿」II は「仏ニ到ル、」に続いて、「時ニ内乱未平定、日々戦争アリ、…」と記述している。「内乱」というのは19世紀最大の都市反乱とされるパリ・コミューン

（Commune de Paris）の乱である。パリ・コミューンを生み出した運動はナポレオン３世の下における第二帝政末期の反帝政運動をその出発点としており、1870年７月、ナポレオン３世がプロイセンに宣戦布告した一因はこの運動の矛先をそらすためであったともいわれる。

ナポレオン３世はセダンでプロイセン軍に捕らえられ、９月４日、パリの民衆は蜂起し、臨時国防政府を樹立して共和制を宣言した。これ以後民衆運動の核になったのは国民軍（Garde Nationale）である。1871年１月28日、フランスとプロイセンとの間に休戦協定が締結されたが、西園寺公はこの当時The Great Republicで太平洋を横断中であった。一方パリでは３月１日、プロイセン軍が入城、３月10日、国民軍は中央委員会を結成、18日の夕方パリの権力をその掌中に収めた。狭義のパリ・コミューンはこの時に始まる。西園寺公がパリに到着したのはその十数日後、すなわち３月末または４月はじめと思われるが、彼は「自伝草稿」I及びIIで「４月２日（西暦）、両党初度ノ戦ナリ、…今日ヲ手始メトシテ、毎日戦争アリ、…」と記している（７、13頁）。政府軍はこの日パリ攻撃を開始し、その数週間後の５月21日、パリに侵入、コミューンが指導する民兵組織との間で市街戦が行なわれ、28日、コミューンは鎮圧された。これが「血の１週間」で、その間、２万5,000人の民衆が虐殺されたという。西園寺公は明治４年３月28日、パリにある学校にいて火薬坑の暴発事件に遭遇したことを記録している（「自伝草稿」I、7-8頁、II、12頁）。これは1871年５月17日にあたる。市街戦が始まる前であるが、このころ彼はパリにいてフランス語を学習中だったのである。５月21日ごろになると、フランス語どころではなくなったであろう。しかし、西園寺公のパリ滞在はこのような状況の下ではじまったのである。

私見であるが、パリまでフランスを熟知し、フランス語にも堪能であった栗本が西園寺公に同行していた（とくにパリ・コミューンの最中に）ことは公にとっては幸運なことで、何かと心強かったのではなかろうか。パリでも、２人はしばしば会っていたことであろう。

４．西園寺公がパリに1871年３月末または４月はじめ到着したと見られることは前述したが、その前後に日本の在仏公使館が設置された。公はパリ滞在中、公使館にも出入りしたことであろう。初代の在仏外交使節は鮫島尚信・少弁務使で、外務省が森・駐米少弁務使を発令する１日前の1870年11月26日（明治３年閏10月２日）、フランス駐箚を命じられた[(4)]。鮫島少弁務使はのち駐在公使、さらに特命全権公使となり、パリに約５年間滞在した（『明治天皇記』第二、349、769頁）。外務大輔に任ぜられて帰国したが、1878年（明治11年）２月８日、ふたたび在仏公使に任ぜられ、同月12日、横浜を出発した（『明治天皇記』第四、369頁）。しかし、1880年（明治13年）12月４日、任所にて死亡した。西園寺公は同年秋にパリを去るが、その直後のことである。

第５章　栗本貞治郎について

ここで、栗本貞治郎（1839-81年）について一言したい。

熊井保編『江戸幕臣人名事典』（新人物往来社、改定新版、1997年刊）及び竹内誠ほか編『徳川幕臣人名辞典』（東京堂出版、2010年）によると、栗本貞治郎の実父は幕臣・堀七右衛門であるが、栗本鋤雲（じょうん）の養子となった。それは1864年12月26日（文久４年11月28日）のことで、当時貞治郎は御軍艦操練所（江戸築地にあった。）教授方手伝、また養父は外国奉行であった。養子縁組の結果貞治郎の養祖父となった栗本瑞見は在日フランス人宣教

師 Emmanuel Eugène Mermet de Cachon と、そしてその紹介で Léon Roches 駐日フランス公使とそれぞれ親交を結び、幕府の親仏政策を推進した人物である（402頁）。また、鋤雲は小栗上野介及び浅野美作守と共にフランス語伝習所の設立に関係した。伝習所が横浜で開校したのは、1865年４月１日（慶応元年３月６日）で [(5)]、翌1866年11月３日（慶応２年９月26日）、第１回卒業式が行なわれたが、貞治郎は卒業生の１人であった。西堀昭『日仏文化交流史の研究 ―日本の近代化とフランス―』（増改訂版：駿河台出版社、1988年）は伝習生の進路に触れており、これによると貞治郎は「外務省」とある（572頁）。しかし、外務省の創設は1869年８月15日（明治２年７月８日）である。彼がのちに明治政府の外務省に関与したことを指しているのであろう。貞治郎は慶応３年８月（1867年８月または９月）、横浜を発ってパリに向かったが、この際はあくまでも伝習生８人の１人として留学のためフランスに渡ったのである。彼は維新後の明治元年（1868年または69年）、帰国した。

フランス語伝習所伝習生の一部につきその履歴書が国立公文書館に保存されており、西堀氏はこれを上記著書に引用しているが(590頁)、これによると貞治郎は1873年（明治６年）１月17日「大使二等書記官被仰付候事」、同９月17日「五等出仕被仰付候事」、1875年（明治８年）９月22日「免出仕」、1876年（明治９年）６月19日「御用係申付」、同年７月11日、「奏任官取扱被仰付候事」、1877年（明治10年）１月20日「依願免御用係」となっている。

貞治郎は明治３年、再度フランスに渡ったが、このときイギリスで西園寺公に会い、一緒にパリに戻ったのである。貞治郎は当時いかなる資格でフランスにいたのかはっきりしない。前掲の『日仏文化交流史の研究』の末尾に付されている「日仏文化交流年表」の1871年の項に「元横浜フランス語学所生徒栗本貞治郎、パリ東洋語学校で日本語を教える。」とある（844頁）。これが、筆者が知り得た貞治郎の再渡仏についての唯一の記録である。なお、貞治郎は御用係を辞したあと３度目のフランス旅行を行ない、1881年（明治14年）、パリで客死した。

第６章　西園寺公の帰国

１．西園寺公は1873年（明治６年）10月、留学を官費から私費に切り替え、引き続きパリに留まった。結局、帰国したのは1880年（明治13年）である。岩井『西園寺公望―最後の元老―』によると、彼が乗船していたタナイス号は同年10月21日、横浜に入港した（39頁）。

この点を、*The Japan Weekly Mail* により改めてチェックしてみよう。1880年10月23日付同紙によると、Le Tanaïs はフランスの客船で（1,735トン）、10月21日、香港より横浜に到着した。乗客名簿に“10 Japanese”とあり、西園寺公がその１人であったことは明らかである（1392頁）。なお、*The Japan Weekly Mail* の印刷所に“ï”の活字がなかったようで、“Tanaïs”が“Tanais”となっている。

Le Tanaïs は11月14日、香港へと出発している（11月20日付、1513頁）。マルセイユ及び横浜の間を往復する定期船で、フランスの Companie des Messageries Maritimes（MM）の所有であった。

２．ところで“Tanaïs”とは何か。タナイスはドン川の古称で、*Grand Larousse Illustré* に“nom ancien du Don”とある。これは中央ロシア丘陵にはじまり、アゾフ海にそそぐ全長1,870キロの川である。ギリシャ人は紀元前四、五世紀ごろから河口付近で植民活動を行なうようになったが、このころドン川は「タナイス川」と呼ばれていた。ドン川は中流以降の流れがきわめてゆるやかで、ギリ

シャ人はこの川を通じて内陸と商業活動を行なった。アゾフ海やこれに連なる黒海の北岸にひろがるステップ地帯では中世にはコサックが中央アジアから移ってきて遊牧生活を送るようになる。ギリシャ人がはじめてタナイスの河口に植民市を作ったとき、周辺にはバルバロイ（非ギリシャ人）がおり、とくにスラブ系のサルマタエ（Sarmatae）という遊牧民が多かったという。前５世紀はじめの対ペルシャ戦で勝利して以来、ギリシャ人は彼等に比べ文化的に劣る者という意識を含んでバルバロイと呼ぶようになったのであるが、彼等がクリミア半島に植民市、とくにタウリケー市を建設するにあたり、しばしばバルバロイとの武力衝突があったようである。ともあれ黒海沿岸にバルバロイと接触するヘレーネス世界が次第に形成され、ギリシャに対する穀物等の貴重な供給地帯の一つとなったのである。

フランス語を自家薬籠中のものとしていた西園寺公は、乗船中フランス人の船長（Reynier といった。）などからこういった話を聞かされたことであろう。

第７章　西園寺公のパリ滞在の成果—ジュディット・ゴーチエとの出会いなど—

１．西園寺公は第１回の外遊で約10年をパリで過ごしたが、『西園寺公望伝』（岩波書店）の第１巻（1990年刊）が述べるように、これは彼の「政治的進路や人生観・趣味・嗜好にいたるまで決定的に影響された事件」となった（205頁）。とくに渡仏直後パリ・コミューンの乱に遭遇したことは、若い西園寺公に大きな影響を与えたであろう。

２．きわめて興味がもたれるのは、西園寺公は1870年から1880年までパリにいたが、当時はたまたまジャポニスムの全盛時代であったという事実である。1856年にパリの版画家ブラックモン（Félix Bracquemont、1833-1914年）が北斎を「発見」した逸話はよく知られているが、その後1867年及び1878年のパリ万博で日本館に出品された品々がフランス人の大きな関心を集めた。

西園寺公がパリ滞在中、高名なフランスの詩人･小説家テオフィル･ゴーチエ（Théophile Gautier、1811-72年）[(6)] の娘、ジュディット（Judith Gautier、1845-1917年）のために主として八代集（古今和歌集以下新古今和歌集まで、八つの勅撰和歌集）及び百人一首から採った88首の和歌を散文で下訳し、彼女がこれを五行詩に翻案して ***Poèmes de la Libellure***（蜻蛉集）と題する本をつくり、パリで上梓したことはよく知られている（1885年）。当時、西園寺公はすでにフランスを去っていた。

ジュディットは東洋趣味の持ち主で、1867年、中国のいくつかの詩を散文体に翻訳して ***Le Livre de Jade***（翡翠集）を刊行している。鹿島茂氏は西園寺が彼女と出会ったのはパリにいた画家の山本芳翠の仲立ちによるらしい、という[(7)]。おそらくその通りであろう。

お茶の水女子大学比較日本学研究センターの『比較日本学研究センター研究年報』第４号（2008年３月刊）には吉川順子「和歌（やまとうた）との戯れ—『蜻蛉集』における翻訳手法とジュディット・ゴーチエの詩作—」、同「『蜻蛉集』全訳」及び「『蜻蛉集』のための西園寺公望の下訳について」の関連３論文が掲載されているが（13-58頁）、筆者はそのいずれも興味深く読んだ。吉川「和歌（やまとうた）との戯れ…」によると、テオフィル･ゴーチエは東洋への強い憧れをもち、ジュディットに中国語を学ばせた、彼女は1903年刊の自伝で「私の父は非常にこれら中国の詩の翻訳に興味をもち、何度か韻文に直したりもしました。」と書いているという。吉川さんのいう通り、ジュディットが『蜻蛉集』の韻文訳を行なうにあたっては父テオフィルが

有形無形の支えとなったことであろう（14頁）。テオフィルにつき、大島清次氏は「浮世絵や日本美術に深い関心を寄せていたことは周知のところである。」といっている[(8)]。

ジュディットは『源氏物語』、『枕草子』や中国の詩を英語に翻訳したイギリス人ウェイリー（Arthur David Waley、1889-1966年）のフランス版に近い存在であったといってよいと筆者は考えているが、これは少々過大すぎる評価かも知れない。

前述のようにジュディットは中国詩もいくつか訳しているが、彼女が散文または韻文で訳出した東洋の文学作品が父親のテオフィルの思想に何らかの影響を与えたか、与えたとすればどのようなものであったかは興味のある問題であり、今後の研究課題である。いずれにせよ、ジュディットの文学活動を支えたことで、西園寺公はパリの文学者たちによるジャポニスムの摂取に一役買ったといい得ると思う[(9)]。

３．西園寺公の実弟、友純（ともいと）（1864-1928年）は旧公家徳大寺家から住友家に入り、第15代当主となった人物であるが[(10)]、西園寺公の勧めに従ってフランス等の名画を多数購入、当時としては他に類を見ない洋画コレクションを築き上げた[(11)]。西園寺兄弟は、２人で日本・フランス間の文化交流に大きく貢献したことになる。

（完）

注

（１）石井良助編『太政官日誌』第４巻（東京堂出版、1980年）に明治３年第47号の関連記事が収められている（258-9頁）。

（２）他の２名は外交官ではなく、例えばコック、メイドのような人達であったことが想像される。

（３）ブルックス（Charles W. Brooks）は慶応３年９月、幕府が在サンフランシスコ名誉領事として任命した（『外務省の百年』上巻、96頁）。幕府の外交文書『續通信全覧　類輯之部　修好門』に「米人『フルークス』ニ桑港在留我国領事ヲ授ケル委任状」と題するファイルがある。雄松堂の復刻版では第４巻、771頁。

外務省調査部編『大日本外交文書』（日本国際協会、1938年）、第３巻によると、1870年５月２日（明治３年４月２日）、外務省は太政官弁官あて伺で、ブルックスをこれまで通り在サンフランシスコ領事（「岡士」といっている。）に命じ置くこととし、そのための委任状を発出したい、またブルックス領事は無報酬であったが今後は手当てとして年１,000ドルを支払いたい、と述べている（699-700頁）。米国政府がブルックス領事の任命（正確には再任命）に対しいつ認可を与えたのかは不明であるが、西園寺公がサンフランシスコに到着したのはブルックス領事が明治政府の下で正式に活動を開始して間もなくであったことは推測に難くない。あるいは明治政府が訓令によって彼に与えた最初の使命が伏見宮殿下、森少弁務使及び西園寺公を含む留学生に対する便宜供与であったのかも知れない。

（４）『外務省の百年』上巻、71頁。

（５）大塚武松『幕末外交史の研究』（宝文社、1952年）、260頁。西堀昭『日仏文化交流史の研究 ―日本の近代化とフランス―』（増改訂版：駿河台出版社、1988年）は、伝習生の１人が慶応元年正月に入学したと述べているとして、開校が同年４月１日より早かった可能性を示唆している（557頁）。なお、慶応元年正月は1865年１月27日から２月25日までである。

（６）テオフィル・ゴーチエはフランスの高名な詩人・小説家で、当初ロマン主義に属して *Premières Poésies*（1830年）等を発表した。のち彼のいう「芸術上の転換」を行ない、小説 *Mademoiselle de Maupin*（1834年）に付した序文で「芸術のための芸術」を唱導、また実際に詩集 *Émaux et Camées*（1852年）でロ

マン主義から離脱し、また1857年には *L'Art* を発表して後進の詩人に対し芸術に没入して社会からは距離を置く高踏派の詩法を示した。かくて、彼は Charles Leconte de Lisle（1818-94年）等の先駆者になった。

（７）『パリの日本人』（新潮社、2009年）、329-33頁。

（８）大島清次『ジャポニスム　印象派と浮世絵の周辺』（美術公論社、1980年）、187頁。

（９）筆者は、パリ以外のフランスでもジャポニスムの普及に貢献した日本人がいた事実を忘れてはならないと考える。例えば、1885年から88年までフランス東部、ロレーヌ地方のナンシー（Nancy）に滞在した日本の画家で山林技師でもあった高島得三（北海、1850-1931）が同地にいた Émile Gallé（1846-1904年）と親交を結び、彼にさまざまな影響を与えた事実はもっと日本でも知られてしかるべきであろう。Gallé は陶器、ガラス器、家具の製造を行なったが、アール・ヌーヴォーを代表する洗練された波状曲線、唐草文による装飾が特色であった。由水常雄編『ガレの芸術ノート』（瑠璃書房、1980年）の末尾に付された「エミール・ガレ略年譜」の1886年の項に「北海と交流。北海、『植物名彙』を贈る。ナンシー園芸協会でガレは日本菊の紹介をする。... この頃よりガレの作品に日本的要素が多くなる。」とある（iv 頁）。なお、同書によると、Gallé は1884年の装飾美術中央連盟展に日本風花瓶を出品しているが（197、199頁）、これは高島がナンシーへ来る前のことである。Gallé は高島を知る前から小さな虫や花をモチーフとする日本の工芸美術に共感していたのであろう。Gallé に限らず、アール・ヌーヴォー様式には植物や昆虫をテーマとするものが多いが、これにも高島の影響が多少はあるかも知れない。Gallé の死後、Henriette 夫人は彼が書き残した文章を集め、*Écris pour l'Art* と題して出版したが（Paris：Librairie Renouard, 1908）、これを田水常男ほかが訳編している（『ガレの芸術ノート』、瑠璃書房、1980年）。また、Charpentier という女性が雑誌 *Le Pays Lorrain* の1879年１月号に高島についての研究を発表しているという。高島のフランス滞在は西園寺のそれより時期が遅く、また短かいものであったが、筆者は彼がナンシーの芸術家に直接・間接的に与えた影響について研究することを次の目標に据えている。

（10）住友財閥を率いる住友本家では1890年（明治23年）11月、嫡流の男系が絶え、翌12月、第12代友親の妻・登久（とく）が第14代当主となった。1892年（明治25年）４月、徳大寺家の友純を登久の長女・満寿（ます）に配し、住友家の養嗣子とした。友純は幼名を隆麿といい、吉左衛門友純として住友家第15代を継いだ。（同家では、家長は第３代友信以来「吉左衛門」を称してきた。）また、友純は春翠と号した（作道洋太郎『住友財閥史』〔教育社、1979年〕、255-6頁）。

（11）友純はパリにいた黒田清輝のパトロンとなったばかりでなく、西園寺公の勧めでフランスの名画を中心に美術品の収集をはじめた。1897年（明治30年）、７ヵ月にわたって米国及びヨーロッパを旅行、同年５月にはパリで西園寺公に会っている。友純は各都市で絵画を購入して帰国し、これらを神戸にほど近い須磨の別邸に飾ったが、第２次大戦中に戦災に遭い、その多くが消失した。友純は中国で出土した古銅器・古鏡の収集家としても有名であった（日本洋画商協同組合編『日本洋画商史』（美術出版社、1994年）、田中淳「産業ブルジョワジーの台頭と洋画の大衆化」、190-206頁）。